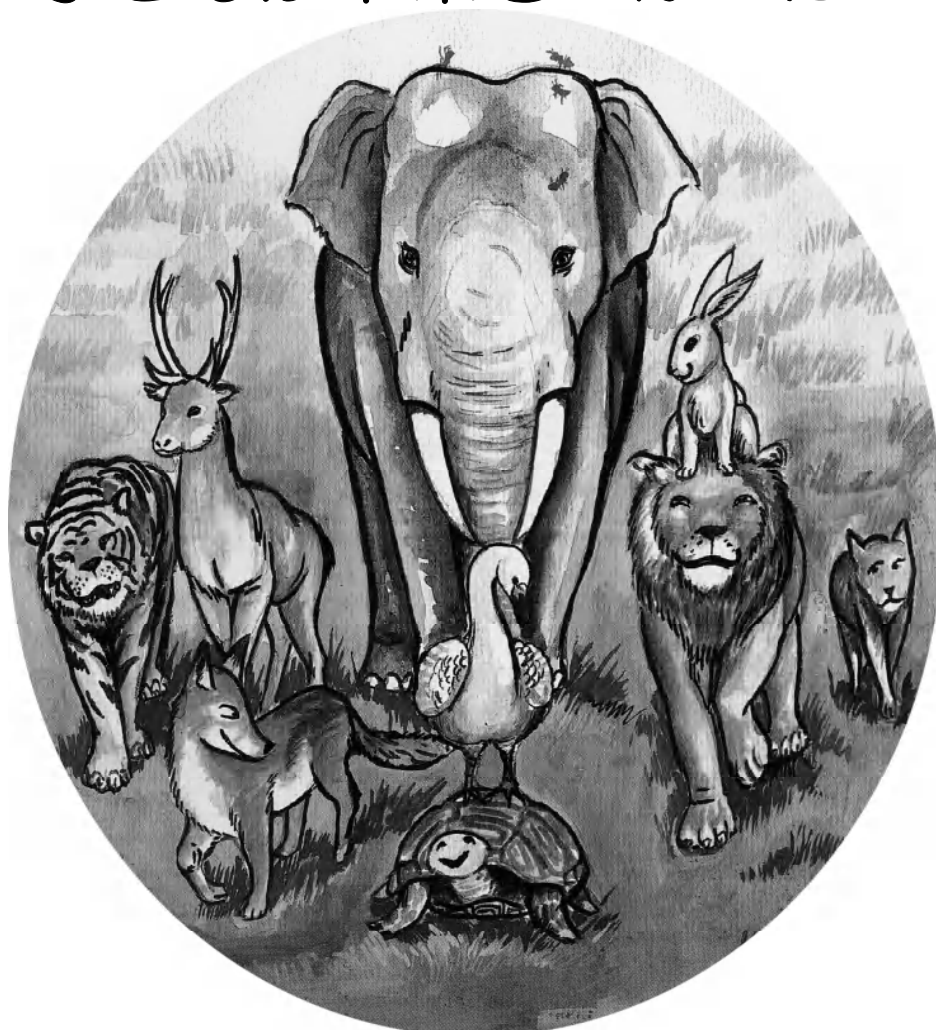


子どもは未来をつかみたい



『詩で読む民話』(2004年出版)より 絵:ソムパヴァン

2005年度 年次報告書

2005年7月1日 - 2006年6月30日

2006年度 年次計画書

目次

2005年度 事業報告

この1年	1
出版プロジェクト	2
読書推進運動	3
子ども文化センター	4
組織運営	5
国内事業	7
2005年度 会計報告・2006年度収支予算 ..	8
2006年度 事業計画	9

この一年

私たちは、ラオスで「子どもが本に親しむことができる環境」「子どもがのびのびと主人公になれる居場所」づくりを進めて、やがて四半世紀になろうとしています。25年前、「ラオスには本がないから、子どもたちに絵本を送ろう」と素朴な気持ちで始めた活動ですが、今や、学校教育の質の向上に、そして学校外での子どもの成長に、大きな意味を持つものになってきています。

今期までにラオスで出版した図書は、122種類56万冊。ラオスの小中学校約8,500校のうち2,424校へ図書箱・図書袋を配付。145校で学校図書室を開設。全国9カ所の子ども文化センターを運営支援しています。昨今は「日本に来る留学生で私たちの本を読んだことがない人はいない」との声も聞きます。現在は、これらの成果をより普及し、定着させる段階にあります。私たちの活動は、中央から地域へ、無償から有償へと、重点を移しています。

最近、「ラオスはどのぐらい貧しいの?」「かわいそうなの?」こうした問い合わせを受けることがあります。世界各地で自然災害や武力行使によって、子どもたちが困難な状況に追いやられているが、ラオスの子ども通信を見ると、きれいな服装の子どもたちが目につくということなのでしょう。

たしかに、私たちに関わってきた四半世紀で、首都は見違えるほどにモノが豊かになりました。しかし、残念ながら子ども自らが学ぶ力を伸ばす環境についての改善は、非常に遅く、全く不十分です。私たちは活動の原点を、ラオスが貧しい、かわいそうだから支援しようという発想からではなく、ラオスで、子どもが力を伸ばそうとしているのにその機会が足りない、すなわち、子どもたちの権利が十分に守られていないことをすこしでも改善したい、ということに置いています。

近年ラオスは、国際機関、日本政府、NGOの援助などによって学校建設が進められ、教科書も徐々に普及し、子どもを学校に受け入れる態勢は整えられてきています。しかし、小学校に入学しても、3人に1人は卒業まで通っていないという現実がまだ続いています。

私たちに関わるのは教室の中、子どもの学びそのものです。先生が黒板に書いたことを書き写して覚えるというこれまでの学校の授業か

ら、先生が本の読み聞かせをしてくれる授業や、自分の興味のある本を手にとって読み、自分を豊かにしていくことができる環境づくりを進めてきました。活動を進めていく中で、各地で聞かれる「子どもが読み聞かせを楽しみにしてくれている」という先生の誇らしげなことばに、私たちは、先生方の教員としての意識の高まりを実感しています。

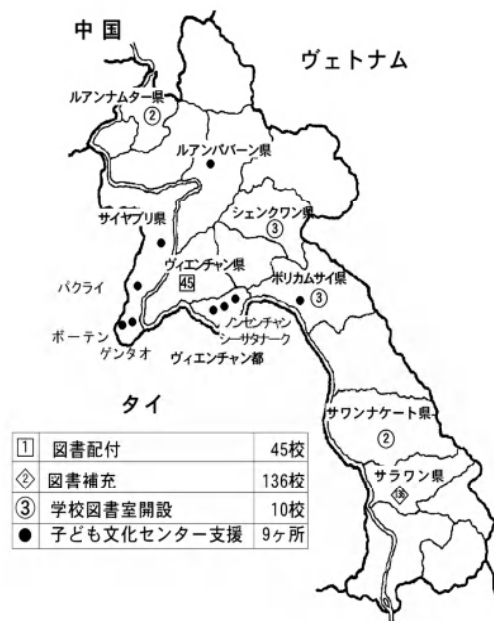
この1年、プロジェクト運営が比較的順調に推移したのに対し、「現地プロジェクトを継続的に支える」という課題の解決の糸口となる、組織運営の強化、自己資金調達はまだまだ充分とはいえません。

とはいえ、東京とラオス事務所のスタッフの能力向上を図る、活動に関わってくださる方々に満足感をもっていただく、継続的に支援していただけるように会員制度（活動会員、賛助会員、寄付者、ボランティアの位置づけを明確にする）を変更するなど、すこしずつですが組織改善の一步を踏み出すことはできました。引き続き、私たちは、活動の質、組織運営の改善を心がけてまいりますので、今後ともご支援のほどをよろしくお願いします。

ご寄付やご支援をくださいました、個人、民間企業、助成財団、政府関係のみなさま、心より感謝いたします。ありがとうございました。

事務局長 野口朝夫

2005年度活動状況



出版プロジェクト

この1年の活動

- 10年ぶりに『絵とき辞書』改訂版を出版
- 4作品25,520冊を出版
- 通算110作・総部数約54万冊となる
- ラオスでの有償譲渡図書が増加

I. 出版

会の中心的なプロジェクトとして出版は本年度も力を入れ、4作品25,520冊を出版しました。資金調達が予定通り進まなかったことから、出版された冊数は計画を40%ほど下回っています。しかし、年度末において出版準備に入っている作品が4作品あり、出版事業全体としては動きが活発化してきています。

また、10年ぶりに、ラオスで流通する唯一の辞書である『絵とき辞書』を大幅改訂し、出版することができました。ラオスでの出版技術が向上したことで、コストが予定より下がり、また多くのご支援を得られたことから、予定より多く1万冊を出版することができました。カラー写真も入り、情報量も増したため、非常に評判もよく、個人での購入希望も少なくありません。

II. 出版委員会

これまで5年間にわたり、当会の出版物の質が高くなるように、また、バランスよくさまざまな分野の出版が企画されるようにと、コーディネート活動をおこなってきた専門家による出版委員会ですが、ラオスでの出版事情が少しずつよくなり、いろいろな人々が自主的に出版をおこなうようになってきたことから、当初の役割を達したと見え、事実上、解散となりました。その過程で、これまで当会が出版してきた図書に関する評価事業の実施が必要なのですが、今期は実施に至らず、来年度以降に持ち越されてしまいました。

当会が進める簡単な編集作業については、外注せず、ラオス事務所で担えるようになっていきます。

III. 出版作品 (作品名/著者/出版部数/主な支援者)

■ 翻訳絵本



『人魚がくれたさくら貝』
長崎源之助(原作) 山中冬児(絵)
ドアンドゥアン(訳)
5,000部
沖電気工業株式会社
国際交流基金

■ 創作絵本

『大きなニワトリ』
サーシャ(文) タータオ(絵)
5,000部
JICA・自己資金
『こんな先生になりたい』
教育省(編纂)
5,000部
JICA・自己資金

■ 辞書

『絵とき辞書』
ドアンドゥアン(編纂)
10,520部
(財)日本国際協力財団
キャノン(株)
(財)地球市民財団
富士通ユニティ労働組合
富士通サポートアンドサービス(株)
トータルゼータエンジニアリング(株)



IV. 長編コンクール

絵本の作り手の発掘、多様化を図るため、長編コンクールの開催を予定しておりましたが、予算が確保できず、実施できませんでした。

V. 本の流通システムの形成

ここ数年、他団体への有償譲渡を積極的におこない、現地での収益確保をめざしています。口コミで譲渡を依頼してくるNGOなどの団体が増え、有償譲渡冊数は増加しています。その結果、得られた資金を新たな本の出版費用に充てることができました。また、書店出店の可能性についても、本年度開催した子どもブックフェスティバルをはじめとした各種イベントで、予想以上に販売への反響が高かったことなどから、都市部では図書を買う層が確実に形成されつつあることが実感できました。手続や許可の都合から、本年度中に事務所に図書販売スペースを設置することは実行できませんでしたが、次年度にはスタートできる予定です。

VI. 資料図書の収集

絵本作りに携わる人々、絵本作りを志す人々のために、ラオス事務所内に資料コーナーの設置を計画しており、これまでの絵本のストックを整理し、配置するための準備をしています。また、これまで、予算不足から実行できなかった、資料用図書の購入についても、徐々に購入を開始しました。

読書推進活動

この1年の活動

- JICAとの開発パートナー事業が終了し、草の根技術協力事業がスタート
- 活動の自立を目指し、人材育成を継続
- どのように活動を継続させていくかが課題

I. 本を読む環境の整備

読書推進活動は、読書が習慣化されることで、子どもたちの識字能力が向上し、表現力を養い、自らの力をのばしていくことをめざしています。

私たちは、JICAとの開発パートナー事業を中心に読書推進活動に関連する各種プロジェクトを実施してきました。

開発パートナー事業「ラオスにおける読書推進運動支援」は、12月1日に3年間のプロジェクト期間を終了しました。この事業では、ラオス語図書の出版、図書箱・図書袋の学校への配付、図書の補充、教員対象の読書推進セミナーの実施を大きな柱として活動してきました。

12月15日からは、フェーズⅡとして、草の根技術協力事業「ラオスにおける読書推進運動の自立的運営のための拠点構築事業」をスタートさせました。この事業では、図書の出版、学校への図書の配付と読書推進セミナーを継続すると同時に、学校から地域へ（読書推進活動を学校全体の活動としていくため、多様な人材の参加を促す）、中央から地方へ（県教育局や郡の教育指導官を実質的に活動を担う人材としていく）、無償から有償へ（図書を買うという転換をはかっていく）という新たな試みをおこなっていきます。

関連プロジェクトでは、ラオス人自身で読書推進活動を担い、自立的に発展していくことを目的とし、ハードからソフト支援へと、支援の質の転換を図るために各種研修を継続しておこなっています。県・郡レベルで、教育局担当官・教育指導官の読書推進セミナーへの参加や指導研修を実施、関係者の自主的な改善が見られるなど成果が見えてきています。



学校図書室

■ 学校図書室（ハクアン）整備

小中高等学校の空き教室などを利用して、学校図書室を開設する活動です。

本年は、小学校6校、中学高校3校、幼稚園1園の計10校に開設しました。近年は現地での資金調達をめざしており、本年は1校がラオスでの支援による開設です。これで当会の支援で開設された図書室は、全国で145か所となりました。

図書室開設の際におこなうセミナーでは、担当教員だけでなく、図書室活動を支援するボランティアの育成にも重きを置き、児童・生徒にも参加してもらいます。

図書室のニーズが高まる一方で、担当者の転勤などに伴い、活動が停滞している図書室が見られることがフォローアップ調査によりわかってきました。また、開設した図書室の数が増えるに従い、図書の補充費用の確保と運営の自立という課題への対処が早急に求められています。

（ご支援：ヘルマーク教育助成財団、三井住友銀行、L-JATS、Ms. Masako Tokutake）

II. 自立へ向けた人材育成

■ 教員養成校「読書推進カリキュラム」支援

読書推進活動のフォローアップ調査により、トレーニングを受けた担当教員の転勤や退職により、活動が途切れてしまう学校が見受けられました。そこで、全ての先生が読書推進活動の意義を理解し、実践できることが活動継続のカギであるとの認識から、2001年より全国8ヶ所の教員養成校で、読書推進担当教員を育成し、その先生たちが学生（先生の卵）を育てるといふ、読書推進カリキュラム普及プロジェクトを実施してきました。

読書推進活動課程が全国の教員養成校で2007年度より正式に導入されることが決まり、テキストの制作も終えたことから、当会が支援してきました5年間のプロジェクトを締めくくる評価会議を3月におこないました。この評価会議には、8校から計21名が参加し、東京からは共同代表の森透が参加しました。カリキュラム実施に向けて、各学校では実情に即した工夫が見られるなど、学校及び担当教員側の準備が整いつつあるといえます。その一方で、担当職員は、退職や転勤などがあるため常に安定している状態ではなく、新任の担当教員のトレーニングが必要であり、学校内でのトレーニングの実施が期待されます。また、新任教員の赴任先の校長が読書指導に理解があることも重要です。引き継ぎと卒業生へのフォローがこの活動のカギとなっています。

（ご支援：国際開発救援財団）

子ども文化センター（CCC）

この1年の活動

- ラオスで初めての子どもブックフェスティバル開催
- CCCスタッフ向けセミナーを実施
- 今後のCCCのあり方を模索中

I. 広がりと定着

私たちが、94年に最初の子どもの文化センターを開設支援して10年余。情報文化省大衆文化局にできたセンター担当が積極的に活動を広め、現在、全国13県20ヶ所で子ども文化センターは展開しています。そのうち、当会は、ボリカムサイ、サイヤブリ、ルアンパバン各県の大規模CCC及び、ヴィエンチャン都シーサタナーク区、サイヤブリ県ゲンタオ市、ポーテン市、パクライ市の小規模CCC、CCCと同様の活動をおこなっているヴィエンチャン子ども教育開発センター（CEC）、ノンセンチャン子ども開発センター（CDC）の合計9ヶ所で運営支援をおこないました。この9ヶ所には、年間のべ22万人の子どもたちが来館しました。

各センターでは、絵画・伝統音楽・伝統舞踊・歌・ゲーム・編み物・織物・英語・演劇・木彫・工作・粘土・人形劇・スポーツ・料理・彫刻・詩・読み聞かせなどの講座が開かれています。CCCには、主に中学生までの子どもたちが活動に参加していますが、卒業した子どもたちが年下の子どもたちの活動をサポートしたり、郊外の学校へキャラバンを組んで出かけ、センター活動を広げる役割を自発的におこなうなど、若手ボランティアの育成という役割も担っています。

II. ラオス社会の変化とCCCの必要性

近年の、都市部での都市化や観光化、農村部での紙幣経済の流入など、急激に子どもたちを取り巻く環境が変化する中、子どもたちを危険から守る拠点としてのCCCの役割が重要になり、また、読書や自己表現など、従来の活動を通じて自分で自分を守る知恵や判断力、知識や情報など、「生きる力」を育むことが、ますます必要とされています。

III. 子どもブックフェスティバルの開催

ヴィエンチャン市教育局の敷地内に開所した子ども教育開発センター（CEC）の開所1周年を記念して、2月に、ラオスで初めての「子どもブックフェスティバル」を開催しました。読み聞かせ・語りのコンテスト、絵のミニコンテスト、作家によるパネルディスカッション、読書コーナー、本の販売コーナー等々、盛り沢山の企画で、1,000人を超える来場者があり、とても盛大なイベントとなりました。

IV. 課題

当会からの子ども文化センタープロジェクトへの支援金額は、基本的に総額は増加させないという方針から、新しいセンターについては、これまでのセンターへの支援額を減らして回すことが合意されています。この方針から、大きな子ども文化センターでは積極的に資金源の多様化を図っています。ただし、当会の立場から見ると、支援金額の減少は、関与の低下につながり、理念の共有などの面で、充分でないことも起こりえる不安があり、対策を考える必要が出ています。

（ご支援：ACA－アークア、ミクプランニング（株）、三井住友銀行、指定募金）

V. CCCスタッフ向けセミナー

設立後10年を超えたCCCでは、館長やスタッフの人事異動により活動の質が低下するという問題ができています。そこで、CCCスタッフの能力向上を目的としたセミナーを実施しました。

特に地方の小規模のCCCでは、研修に参加できる機会がなかなかないことから、可能な限り各センターから全スタッフが参加できるようにしました。また、センターによっては新人スタッフも多いことから、CCCの活動の中心である、読書推進活動の基礎（本の紹介、読み聞かせ、紙芝居、本の内容を応用した劇）を学ぶ内容としました。

（ご支援：株式会社損害保険ジャパン）

VI. 子どもの日のイベント

本年度の子どもの日のイベントは、ヴィエンチャン都ハッサイフォーン区にて実施しました。CECから中高生のボランティアチームと国立図書館スタッフとが一緒に出かけ、読み聞かせ、読書、劇、絵画、ゲーム、クイズといった子どもが楽しめるイベントをおこなないました。



子どもブックフェスティバルの一幕

組織運営

この1年の活動

- 組織強化に向けて会員・ボランティアを明確化
- 会員数は若干増加
- ボランティアの力が活動を支える
- ラオス事務所での資金調達の働きかけが進む

I. 全体運営

■ 理事会

本年度、理事会は計11回開きました。理事会では、運営体制の強化、財政問題、プロジェクトの評価、展開、今後などについて、活発な話し合いをおこないました。とりわけ、新会員制度の普及と定着について、何度も議論を重ねました。

■ 会員

年度末での会員数は、活動会員 58名、賛助会員 513名（うち団体 5）です。新制度への移行に先駆け、会員登録の呼びかけを進めた結果、昨年度に比べ30%ほど増加しました。会員制度の変更と同時にボランティア登録も、誓約書を交わして役割と責任、保障を明確化するなど、これまでより明確なものになりました。

■ 運営会議

会員とボランティアが参加し、活動方針などを確認しながら共有する場である運営会議は、計11回、延べ167人（うち理事とスタッフが70人）が参加しました。事務局スタッフが新しくなり、これまでの経験を蓄積している、長らく活動に関わっている会員、ボランティアがイベントや活動を支える傾向が強くなっています。

■ 2005年度通常総会

8月13日、第3期通常総会を、31名（活動会員26名賛助会員5名）の会員の出席のもと開きました。04年活動報告、05年活動計画を承認するとともに、



通常総会

チャンタソン・インタヴォン（共同代表）、森透（共同代表）、野口朝夫（事務局長）、風間美苗、小川直美、塩谷光、近藤知子、小沼千秋の理事、野口賢一の監事が2年の任期で選出されました。

■ ラオス事務所計画参加

現地における駐在日本人スタッフとの話し合い、調整は日常化しており、プロジェクトの進捗状況、必要事項など、東京事務所でもほぼ把握できてきています。活動の細部はラオス事務所で決定し、東京事務所には報告をおこなうという流れは定着してきたといえます。

■ 中期計画

第3次中期計画の2年度の達成については、年度内に評価会議を開く計画でしたが、時間が確保できず、年度を越した7月に簡単な評価を合宿でおこないました。

II. 東京事務所

■ 体制

12月まで、常勤専従スタッフ1名、非常勤スタッフ1名、常勤非専従事務局長で運営してきましたが、12月末から、常勤専従スタッフ2名（猿田由貴江・黒古真由）、常勤非専従事務局長（野口朝夫）の安定した運営体制を組むことができました。長らく東京事務所を担ってきた小川直美、近藤知子の2名はスタッフを退きましたが、理事として引き続き関わることで、当会の経験の蓄積が生かされる体制が整いました。

■ 資金調達

一般寄付は減少しましたが、指定募金は増加しています。しかし、ご寄付総額は昨年引き続き減少しています。また、企業、政府資金からのプロジェクトご支援も、若干減少しています。助成団体に関しても、何年も継続して助成を受けることが難しいこと、申請する団体が増えていることなどから、助成を受けることが困難となってきています。

自己資金調達の一環として、やべみつのりさんのご協力により、当会オリジナルの一筆箋・便箋を作成し、販売を始めました。

■ ボランティア

継続的なボランティアは約30名程度です。近年は大学生やシニアの参加も増え、イベントなどの大きな力になっています。ボランティアの方々の積極的な参加は、新しくスタッフが変った事務局の経験不足と慢性的な人手不足を補っています。

■事業調整派遣

各事業調整のため、当会による2005年度の派遣は以下の通り実施しました。

- 05年 11月12日～11月17日：野口朝夫
子ども教育開発センター視察など
- 06年 2月10日～2月23日：猿田由貴江
JICA草の根技術協力事業の業務調整など
- 3月13日～3月21日：森 透
教員養成学校セミナー評価会議など

この他、8月、3月にチャンタソンが現地に出張した際、事業調整をおこなっています。

III.ラオス事務所

■体制

ラオス事務所の人員体制が大きく変わりました。ダラー・カンラヤー氏を顧問として迎え、事務所運営とスタッフの育成にも積極的に取り組んでいます。従来の家族的運営から組織的運営へと転換を進めています。

現在の体制は以下のとおりです。

- | | |
|---------|----------------|
| ダラー | アドバイザー |
| ミンクワンカム | コーディネーター |
| スッター | 会計担当 |
| スラピー | 読書推進事業担当 |
| マライポーン | 事務業務及びCCC事業担当 |
| チャンシー | 図書管理及び研修実務担当 |
| ヴィライポーン | 事務所図書室管理及び清掃担当 |
- この他、日本からJICA草の根技術協力事業担当として赤井朱子が派遣スタッフとして駐在しています。

■現地での資金調達

上半期は新しい人事体制を整えることに重点をおいていたため、資金調達を充分におこなえませんでした。下半期に入り、企業や団体に積極的な働きかけを始め、次年度のご支援がいくつか決定しました。

■広報

マスメディアやインターネットが整備されていないラオスでは、事務所への個別のお問い合わせや来訪者を通しての広報が最も有効な手段です。本年度は、ラオス語版と英語版のパンフレットを新規に作成、さらに、活動紹介パネルの内容更新をすることができました。これらの資料は、事務所を訪問する方への対応に加えて、イベント参加の際などにも積極的に活用しました。ラオスで活動する国際NGOを紹介する英文ホームページでの、会の活動紹介の掲載も実行することができました。

■イベント

ラオスでも、近年さまざまなイベント、訪問受入が増加しています。

- 8/4 自治労東京ツアー視察受入
- 8/4-6 “ベープサート”ワークショップ(SVA、CCC局主催)参加
- 8/11-31 学習院女子大学インターン受入
- 8/19 じゃっどスタディーツアー一行受入
- 8/23 うつくしま県民の翼(福島県国際協力国際交流事業)一行受入
- 8/30 インターンによるCEC講座 発表会
- 9/22-23 国際ソロブチミスト小田原のご支援による植樹協力
- 10/27-29 (財)国際開発救援財団教員養成校視察に同行
- 11/10-11 教員養成校フォローアップセミナー実施
- 11/12 CEC講師ミーティングの実施
- 11/14 開発パートナー事業機材引渡式
- 11/27 JOCV40周年記念イベント参加
- 1/30 JICA草の根技術協力事業モニタリング調査団の訪問受入
- 2/3-4 子どもブックフェスティバルの開催
- 2/9,12 学習院女子大学スタディーツアー受入
- 2/13-14 読書環境調査
- 2/15-17 読書推進セミナーの実施
- 3/13-15 教員養成校読書推進事業評価会議
- 5/3-5 CCCスタッフ研修実施
- 5/31 「子どもの日」フェスティバルに参加

■対外活動

ラオス事務所駐在赤井朱子が、ラオスで活動する日本のNGOによる月例NGOミーティング(JANM)に、ミンクワンカムがラオスで活動するNGOの集まりであるInternational NGOミーティングに出席し、様々なテーマで情報交換をおこないました。

■コンクール応募

子ども文化センターの講座の成果を発表するという意味もあり、本年も、ラオス事務所がまとめ、日本の紙芝居や絵画コンクールに応募しました。

- 7月 第15回箕面手づくり紙芝居コンクール
大阪府 応募 10作品 受賞 2名
- 11月 第6回手づくり紙芝居コンクール
神奈川県 応募 10作品 受賞 1名
- 可児 手作り絵本コンクール
岐阜県 応募6作品 受賞1名
- 3月 第14回世界子ども愛樹祭コンクール
福岡県 応募 133作品

国内事業

I. 広報

■ニュースレター

本年度はニュースレター「ラオスのこども通信」を7月に35号1,700部、12月に36号2,600部、4月に37号2,000部の計3回6,300部を発行しました。写真を増やし、はじめての方でも読みやすい記事を増やしたり、ボランティアによる記事を設けたり、当会ならではのラオス現地の情報を多く載せるように企画を工夫しました。

■ホームページ

いろいろな情報を掲載し、幅広い広報をおこなっていく必要性が出てきたため、全面刷新することを検討してきましたが、作業のための時間を割くことができず、実現できませんでした。

■リーフレット

表2色、内4色カラーの新しいリーフレットを作成しました。水準の高いものができ、広報ツールとして非常に期待されます。



ニュースレターとリーフレット

■イベント/ボランティア

東京事務所のスタッフ交代もあり、本年度は若干参加イベント数が減っています。

この1年間、イベントボランティアとして活動してくれた方は、延べ198名、うち37名が留学生でした。新しい成果として、インターンの積極的な関与があります。また留学生との連携は会の国内活動の特長となっています。

■その他

英文サイトの立ち上げ、企業向けメールマガジン、訪問ツール、DMなどの開発、イベント用、ボランティア向け紹介ツールの開発などは、実現できませんでした。

また、マスメディアへの積極的・継続的な働きかけも充分おこなうことができませんでした。

この他、JANICのNGOキャンペーンに参加し、広報をおこなっています。

II. ラオス語絵本プロジェクト

個人でも、団体企業でも参加しやすい活動として、国内活動の一つの柱となっているプロジェクトです。本年は、ラオス語絵本プロジェクトに関する問い合わせが増えてきています。完成した本は、昨年よりは若干増え、808冊でした。

しかし1年以上、翻訳シートが準備中となっている図書があり、翻訳のある図書の種類を増やすことができませんでした。

III. 書き損じハガキ収集キャンペーン

1年間で計177件、50円の書き損じハガキ7,199枚相当、333,945円分のご支援をいただきました。絵本1,060冊分に当たります。目標の1万通には達しませんでした。キャンペーンのためのチラシを工夫し、通信発送の際に書き損じハガキの募集を積極的におこなったことにより、去年の1.5倍の収集量となりました。

IV. インターン受入

昨年からはまった学習院女子大学からのインターン受入が継続しています。東京事務所でインターンを経験した学生が、ラオスで事務所補助の他、CECで優れた独自の活動をおこなうなどの成果が見られました。

V. ネットワーク活動

昨年に続き、共同代表森透が外務省NGO研究会、教育協力NGOネットワーク研究会(JNNE)に参加。事務局長野口朝夫が国際協力NGOセンター理事、JANIC-UNICEFの『南』の子ども支援NGO能力強化委員会に係りました。

現在、当会は、対外的ネットワークを広げるとともに、活動の質を向上させるため、国際協力NGOセンター(JANIC)正会員、教育協力NGOネットワーク研究会会員、紙芝居文化推進協議会会員、ラオスで日本NGOミーティング(JANM)参加団体となっています。5月には、「なくそう！世界の児童労働」キャンペーンに賛同しました。

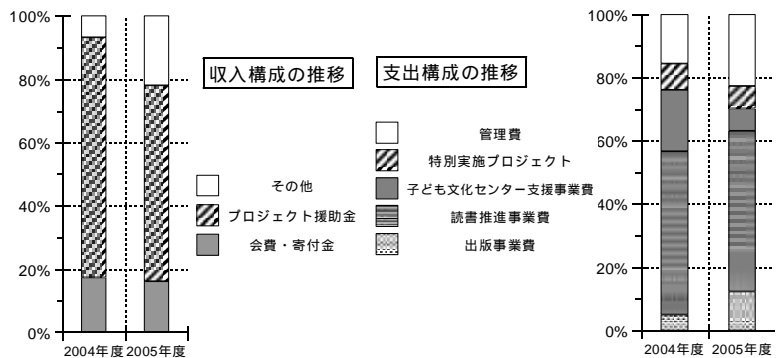
収入の部		(単位:円)			
科目		2004年度決算	2005年度予算	2005年度決算	2006年度予算
会費・寄付金	小計	8,631,674	6,075,000	7,271,465	8,100,000
内訳	一般寄付金	5,473,591	4,000,000	3,982,465	4,000,000
	活動会員年会費	49,500	75,000	357,000	1,100,000
	指定募金	3,108,583	2,000,000	2,932,000	3,000,000
プロジェクト援助金	小計	37,672,225	18,000,000	27,738,278	21,800,000
内訳	民間一般助成金	7,923,985	10,000,000	6,895,750	7,000,000
	政府系補助金・助成金	28,839,983	6,000,000	20,157,867	14,000,000
	補助金・助成金(現地受取)	908,257	2,000,000	684,661	800,000
その他	小計	3,375,297	3,600,000	9,891,796	4,720,000
内訳	特別指定			5,553,115	
	イベント収入	2,801,476	3,000,000	2,851,352	3,520,000
	雑収入	573,821	600,000	1,487,329	1,200,000
当期収入合計		49,679,196	27,675,000	44,901,539	34,620,000
前期繰越金		14,362,089	9,171,987	9,171,987	20,361,551
収入合計		64,041,285	36,846,987	54,073,526	54,981,551

支出の部		(単位:円)				
科目		2004年度決算	2005年度予算	2005年度決算	2006年度予算	
事業費	小計	46,335,623	26,026,240	26,059,735	35,493,492	
内訳	出版事業費	2,736,337	7,609,200	4,125,506	4,351,722	
	読書推進事業費	28,298,838	12,579,240	17,174,835	23,472,914	
	子ども文化センター支援事業費	10,687,040	3,271,800	2,355,956	3,592,156	
	特別実施プロジェクト	4,613,408	2,566,000	2,403,438	4,076,700	
管理費	小計	8,533,675	7,992,480	7,652,240	6,608,370	
	東京事務所経費	計	7,576,723	6,516,000	6,259,217	5,639,000
内訳	家賃・水道光熱費	558,000	558,000	558,000	618,000	
	通信費・運搬費	224,106	222,000	172,592	215,000	
	事務費・記録費	229,841	216,000	144,158	216,000	
	広報費	571,556	550,000	1,159,714	1,090,000	
	人件費・交通費	5,650,648	4,600,000	3,947,600	3,060,000	
	備品消耗品費	0	30,000	10,750	100,000	
	諸会費・会議費	192,946	190,000	133,412	170,000	
	雑費・リース料他	149,626	150,000	132,991	170,000	
	ラオス事務所経費	計	956,952	1,476,480	1,393,023	969,370
内訳	家賃・水道光熱費	89,770	219,600	202,630	148,680	
	通信費・広報費	22,061	49,200	12,676	33,040	
	事務費・記録費	43,000	72,000	11,227	49,560	
	人件費・交通費	620,550	914,880	589,109	407,690	
	備品消耗品費	64,328	64,800	77,928	70,800	
	諸会費・雑費他	117,243	156,000	499,453	259,600	
予備費			1,500,000		1,500,000	
当期支出合計		54,869,298	35,518,720	33,711,975	43,601,862	
当期収支差額		-5,190,102	-7,843,720	11,189,564	-8,981,862	
次期繰越収支差額		9,171,987	1,328,267	20,361,551	11,379,689	

本年度の収入は、予算より大幅に増加しています。これは、JICA草の根技術協力事業が予算作成後に決定したため、予算案収入には含まれていなかったことによります。全般にその他の収入は前年度比、減少していますが、新しい会員制度による会費収入や、現地での収入が増加しています。

支出では、作業が遅れ、期を越えてしまった紙芝居出版、資金調達できなかった図書コンクール、子ども文化センター館長研修などが予算通りになっていません。また読書推進の統括管理ではスタッフの交代などから、決算額が減少しています。子ども文化センター分の調査のためのスタッフ派遣も、資金調達ができず、実施できませんでした。

今期の繰越金は約2,000万円となりますが、このうち約1,030万円が配付図書購入費、教員養成校奨学金、指定募金05年度分など、プロジェクト指定が決定している額です。機動的かつ安定した組織運営のためには、もう少し内部留保が必要と考えています。



I.プロジェクト運営

■出版

今、ラオスの子どもにとってどんな本が必要かという視点と、一般に出版されていない種類や新人の作品などに重点をおき、継続的に多様な図書を出版していきます。

スタッフの編集技術を向上させ、質の高い本の制作と、新人の育成をおこないます。さらに「本をもらうものから買うものへ移行したい」という思いから、書店設置をスタートさせます。

- (1) 子ども向け図書編集と出版
- (2) 作り手の発掘、多様化を期待して、コンクールを開催します。
- (3) 事務所内に、本の販売コーナーを設置し、本の流通システムの形成を図ります。

■読書推進活動

1) 環境整備

JICAとの連携事業のフェーズⅡとして、昨年12月に開始した草の根技術協力事業を中心に読書推進活動の環境整備を継続します。

- ・新規図書の配付165校、補充図書の配付206校におこないます。
- ・学校図書室(ハクアン)を14校にて新規開設、既設の図書室へ図書を補充します。
- ・現在の図書室担当者向けのフォローアップとして「読書推進セミナー」を実施します。

2) システム化と人づくり

- ・各地の教育指導官及び読書推進担当官と連携し、各地域での活動状況を把握します。
- ・既に開設した学校図書室担当者を対象に、学校図書室事業評価会議をおこないます。
- ・教員養成校における読書推進カリキュラム化事業の実施状況をフォローします。

3) 普及・定着

- ・子どもも大人も読める読書推進ニュースレターを発行します。
- ・第2回子どもブックフェスティバルが開催できるよう全面的にサポートします。
- ・これまでの「読む」ことを中心とした活動から、「書くこと」も含んだ活動へと発展させます。

■子ども文化センター(CCC)

10年以上にわたる活動で、「子どもの居場所」「自己表現・自己実現の場」としてラオス社会に定着してきたCCCにおいて、持続可能な運営がおこなわれるよう、館長、スタッフ、指導員、青年OB・OGと理念の

共有を深め、スタッフたちの研修により、より質の高い活動になるように支援をおこないます。さらに地域や父母との連携を深めます。また、活動において「子ども参加」を促進します。

- (1) 9館の運営支援を継続します。
- (2) 活動の理念や役割を共有するための「活動ハンドブック」を作成し、セミナーを実施します。
- (3) 館長に対する、運営・資金調達能力向上のための研修、及び、子どもに提供するプログラムの質向上のためのスタッフ・トレーニングをおこないます。
- (4) CECの若手ボランティアチームとともに、ヴィエンチャン郊外の地域での、読書推進活動をおこないます。
- (5) プログラムを多様なものとするため、必要な教材が確保できるようにしていきます。
- (6) 地方の小規模CCCの活動の安定化をはかるため、ヴィエンチャンからスタッフを派遣し、各センターとの情報交換をおこなっていきます。
- (7) 変化する子どもたちの問題に対し、CCCだけでは担いきれない部分については、他の機関との連携を進めながら、問題に対処していきます。

■自立支援 青少年支援

子どもたちを取り巻く様々な問題への対応を準備します。

- ・各センター(CCC/CEC)において、青少年ボランティア活動を支援していきます。
- ・「特に困難な状況にある子どもたち」(CEDC)へのサポートを模索していきます。

■調査

図書配付時の子どもの調査を継続します。

II.国内事業

■広報

懸案事項となっているホームページの全面刷新を最優先課題としておこない、より豊かな情報発信と頻繁な更新を図ります。その他の広報手段として、企業団体への訪問ツール、DMなどの開発、イベント用、ボランティア向け紹介ツールの開発などをおこないます。年次報告書を日英語で発刊します。ニュースレターは年3回の発行を継続します。25周年イベントを含め、メディアへの情報発信も積極的におこないます。

■イベント

昨年度の方針と同じく、会が主催するイベントを増

やし、会のメッセージを対外的に発信するチャンスを増やします。

■ラオス語絵本プロジェクト

首都圏在住以外の方、企業、学校単位の参加など、様々な形で活動に参加できる大切なツールでもあるこのプロジェクトを、今年も積極的に推進してゆきます。

■書き損じハガキ収集キャンペーン

積極的に返送用封筒の配付をおこない、ハガキ1万枚相当の成果をめざします。

III.組織運営

■全体運営

組織運営の効率と質の向上をすすめ、資金調達のための積極的な活動を展開します。

理事会 各理事の役割をはっきりさせ、理事の仕事量の平準化、低減をはかります。

会員 新しくなった会員制度を活かし、組織強化を進めます。新しい活動会員、賛助会員の増加を図るために積極的な働きかけをおこない、活動会員80名、賛助会員200名を目指します。

計画評価・推進 第3次中期計画の最終年であることから、計画が目標通り達成されているか、読書推進活動の評価とともに、ラオスにおいて中期計画の評価活動をおこないます。また、今後の10年の活動を視野に入れながら、第4次中期計画の策定をおこないます。

ネットワーク 活動の質の向上と国際社会への貢献を進めるために、引き続き国際協力NGOセンター(JANIC)に正会員団体として参加します。また、ラオスで活動する国際NGOのネットワークも強化します。

■東京事務所

体制 常勤専従スタッフ2名、常勤非専従事務局長1名で運営を担当します。充分でない事務局体制で運営をおこなうにあたり、業務の優先順位の明確化をすすめます。

資金調達 新しい会員制度による会費収入を増やし、自主財源の比率が高まるように努めます。

個人、企業ともに、ご支援を受けやすくなるために、認定NPOの取得の準備をすすめます。

ボランティア 前期末より引き続き、役割と責任、参加、保障などを定めた、ボランティア契約を結び、明確な合意のもとで活動がおこなわれるよう

にしていきます。またボランティアの研修の機会を設け、活動への参加度が上がるようにすすめます。活動説明会を今年も定期化し、新しい参加者の積極的な加入をはかります。

■ラオス事務所

体制 引き続き、ラオス人スタッフ7名、日本人駐在スタッフ1名、顧問1名の体制で運営します。事務所でのNGO活動の理念の共有をすすめるため、ラオス語による、使命・理念・活動計画の文書化をおこないます。

資金調達 ラオス国内の外国政府機関、NGO、企業などからの資金調達量を増やすよう、より積極的に働きかけをおこないます。

広報 新団体名がラオスでより定着するよう、積極的な広報活動を心がけます。

各国のNGOと連携したプロジェクト展開を増やす目的で、プロジェクト内容の広報を活発化します。

イベント 会の活動をラオスで広く認知してもらうために、子どもやNGOに関わる各種イベントに、積極的に参加してゆきます。そのために、参加基準、訪問受入基準を早急に作成する必要があります。さらに、ブックフェアなど主催イベントを実施し、ラオス社会での存在感を強めるようにします。

対外活動 ラオスで教育に関わる活動をおこなっている団体との交流、情報交換をより深め、相互に利点を生かせるような協力関係を築いてゆきます。

インターン 日本での組織拡大の一環として、また、活動のPRの場として、ラオス事務所における、インターンの受入を進めます。そのためのルール作りをおこないます。



ラオス事務所スタッフ

■2006年度役員

理事 チャンタソン インタヴォン(共同代表)
森 透(共同代表) 野口朝夫(事務局長)
小沼千秋 風間美苗 塩谷 光
小川直美 近藤知子

監事 野口賢一

特定非営利活動法人

ラオスのこども
DeknoyLao



東京事務所

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12,303

TEL/FAX 03-3755-1603

E-mail deknoylao@yahoo.co.jp <http://deknoylao.org>

ラオス事務所

035/3 NOUAI 05 SAMSENETHAI RD. SIHOM CHANTHABURY,
VIENTIANE LAO P.D.R. P.O.BOX1518

TEL/FAX 856-21-21-3449

E-mail [aspb @ laotel.com](mailto:aspb@laotel.com)